

日本人英語学習者における明示的文法知識の役割： 自動化した明示的知識と口頭運用能力の関係

岡田，美鈴

<https://doi.org/10.15017/1654606>

出版情報：九州大学，2015，博士（比較社会文化），課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏名	岡田 美鈴			
論文名	日本人英語学習者における明示的文法知識の役割 —自動化した明示的知識と口頭運用能力の関係—			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	井上 奈良彦
	副査	九州大学	准教授	志水 俊広
	副査	九州大学	准教授	李 相穆
	副査	九州大学	准教授	保田 幸子
	副査	北海学園大学	教授	浦野 研

論文審査の結果の要旨

本研究は、日本人英語学習者における明示的文法知識、特に自動化した明示的知識の役割を明らかにし、口頭運用能力との関係を探ることを目的としている。

第1章では、研究の背景や目的について、これまでの日本の英語教育における議論や学習指導要領の変遷、文法知識に関する実証研究などを概観し、日本人英語学習者の持つ明示性等の文法知識の性質、その性質ごとの口頭運用能力との関係性について、一致した見解に至っていないことを明らかにした。したがって、本研究では、日本人英語学習者を対象に、複数のテストを組み合わせた多角的な調査を行い、彼らの持つ文法知識の性質を項目ごとに明らかにし、性質と項目ごとに見る口頭運用能力との関係について調査することとした。第2章では、第二言語習得研究や認知心理学の分野における明示的及び暗示的知識の概念を軸に、意識、注意、気づき、アウェアネス、情報処理モデルといった関連する諸概念を概観した。第3章では、これらを基に、文法知識の性質を多角的に調査した過去の実証研究を精査し課題を明らかにした。

第4章において、第2章及び第3章から浮かび上がってきた問題点をもとに仮説を立て、以下のように研究課題を設定した。研究課題①日本人英語学習者が持つ文法知識は、項目ごとに統制的な明示的知識や自動化した明示的知識として分類することができるか。研究課題②日本人英語学習者の持つ文法知識において、統制的な明示的知識や自動化した明示的知識はメタ言語知識との関連性が認められるか。研究課題③日本人英語学習者の持つ自動化した明示的知識は、口頭模倣能力と関連性が認められるか。研究課題④自動化した明示的知識と口頭模倣能力によって、口頭運用能力を説明することができるか。また、本研究の調査方法論を詳細に説明した。調査方法は、60問からなる **speeded** (直感での判断を促す) 多肢選択型文法テスト、17問からなるメタ言語知識テスト、36問からなる文法性を判断するリスニングテストを伴う口頭模倣テスト、テスト開始前に行う英語学習背景調査、テスト終了後に行うテストを振り返るためのアンケートである。

第5章及び第6章では、調査の結果を報告し、研究課題に沿って考察を述べた。まず、研究課題①について、**speeded** 多肢選択型文法テストによって明示的知識と自動化した明示的知識を区別するために、同テストにおけるネイティブスピーカーの反応時間を測定し、平均値を算出した。日本人英語学習者の同テストにおける反応時間と比較すると、すべてにおいて有意差と効果が見られたことから時間的指標として採用した。通常の採点と、日本人英語学習者の反応時間と指標を比較しながら行った採点によって、明示的知識を多く含むスコアと、自動化した明示的知識を多く含むスコアの算出に成功した。

研究課題②におけるメタ言語知識と文法知識の関連性については、予備調査における時間制限を

設けない多肢選択型文法テストのスコアとメタ言語知識テストのスコアに相関が見られた。同テストのスコアから参加者を上位群と下位群に分けたところ、上位群では相関は見られず、下位群では相関が見られた。さらに、**speeded** 多肢選択型文法テストによる明示的知識とメタ言語の間にも弱い相関が見られた。一方、自動化した明示的知識はメタ言語との間には相関が見られなかったため、時間をかけて解いた場合や、学習が進んでいない場合にメタ言語知識と関連性があることが判明した。

次に、研究課題③における自動化した明示的知識と口頭模倣能力の関連性については、両者の間に強い相関が見られた。また、**speeded** 多肢選択型文法テストにおける対象文法項目が多いため、文法性を判断するリスニングテストを伴う口頭模倣テストで扱った文法項目に合わせ、**speeded** 多肢選択型文法テストから対応のない文法問題を抜いて分析を行った。その結果、全体的なスコアで分析した結果と変わらなかった。さらに、口頭模倣テストに含まれる文法的な文と非文法的な文を分類し、明示的知識と自動化した明示的知識との相関を見たところ、文法的な文は自動化した明示的知識と強い相関が、非文法的な文は自動化した明示的知識と相関が見られた。これらの結果から、口頭模倣能力と幅広い文法項目が自動化されていることには、強い関連性があることが判明した。

また、研究課題④における口頭運用能力の測定については、本研究において使用した口頭模倣テストだけでは、自由で即時的な産出力を見ることは困難であり、インタビューや別の口頭テストを併用する必要があることが、今後の課題として残った。本研究の最大の目的のひとつである文法項目ごとの性質については、明示的知識であるもの、自動化した明示的知識であるもの、自動化した明示的知識であり口頭模倣で使用できるものなど、複数のテストによってそれぞれの内在度が明らかになった。

以上のように、本論文は第二言語習得および英語教育の分野において価値ある貢献となるものである。よって、論文調査委員会は、博士（比較社会文化）の学位に値すると判断した。